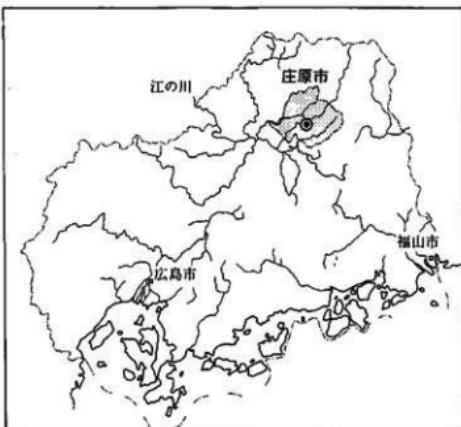


# 宮山2号遺跡発掘調査報告書

1999

財團法人 広島県埋蔵文化財調査センター

# 宮山2号遺跡発掘調査報告書



庄原市位置図 (●は遺跡を示す。)

1999

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

## 例　　言

1. 本書は、1998（平成10）年度に調査を実施した国営備北丘陵公園整備事業に係る宮山2号遺跡（庄原市戸郷町所在）の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、建設省中国地方建設局国営備北丘陵公園工事事務所との委託契約により財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 発掘調査は沖元美穂子、渡邊昭人、梅本健治が担当した。
4. 出土遺物の整理・復元・実測・図面の整理・写真撮影は渡邊・沖元が中心となって行った。
5. 本書の執筆及び編集は沖元が行った。
6. 遺構の表示記号は、S B：竪穴住居跡である。
7. 本書に使用した方位は第1・2図が真北で、ほかはすべて磁北である。
8. 第1図は建設省国土地理院発行の1:25,000の地形図（庄原・稻草・永田・三良坂）を使用した。

## 目 次

Iはじめ	(1)
II位置と環境	(2)
III調査の概要	(6)
IV遺構と遺物	(7)
Vまとめ	(12)

## 挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)	(3)
第2図 周辺地形図 (1:2,000)	(6)
第3図 遺構配置図 (1:200)	(7)
第4図 SB 1実測図 (1:60)	(折込み)
第5図 SB 1出土遺物実測図 (1) (1:3) 弥生土器	(9)
第6図 SB 1出土遺物実測図 (2) (1:2, 1:4) 石器	(11)

## 図版目次

図版 1	a 遺跡遠景 (南西から)	図版 4	a SB 1 土層断面 (南北方向南半, 西から)
	b 同 上 (南西から)		b 同 上 (南北方向北半, 西から)
	c 遺跡近景 (調査前, 西から)		c SB 1 遺物出土状況 (西から)
図版 2	a 遺跡全景 (調査前, 北から)		d 同 上 (甕1)
	b 同 上 (調査後, 北から)		e 同 上 (底部11)
	c SB 1 検出状況 (北から)	図版 5	a SB 1 完掘状況 (西から)
図版 3	a SB 1 検出状況 (西から)		b 同 上 (北から)
	b SB 1 土層断面 (東西方向, 南から)		c SB 1 作業風景 (西から)
	c 同 上 (南北方向, 西から)	図版 6	出土遺物

## I はじめに

宮山2号遺跡の発掘調査は、国営備北丘陵公園整備事業に係るものである。本事業は、庄原地域の良好な自然条件を巧みに活かしながら、中国地方の歴史や文化とふれあい、多様なレクリエーション活動をとおして人間性の回復と向上の場を整備することを目的として計画された。

建設省中国地方建設局国営備北丘陵公園工事事務所（以下「建設省」という。）は、1986（昭和61）年11月及び1988年5月に国営備北丘陵公園整備区域309ha（湖水、ほ場などを除く）について、文化財等の有無及び取扱いを広島県教育委員会（以下「県教委」という。）と協議した。県教委はこれを受けて現地踏査を行い、宮山2号遺跡が含まれる第2期事業区域（180ha）内については、1988年7月及び1989年2月に古墳6基、古墓1基と試掘調査が必要な箇所が15か所ある旨を回答した。県教委はそれらの一部の試掘調査を実施し、宮山2号遺跡（223m<sup>2</sup>）を確認した旨、1998年1月に建設省に回答した。

宮山2号遺跡の取扱いについて、県教委・庄原市教育委員会（以下「市教委」という。）は建設省と協議を重ねたが、現状保存は困難であるとの結論に達し、事前の発掘調査が必要である旨を建設省に通知した。これを受け、建設省は宮山2号遺跡の発掘調査を県教委に依頼した。県教委は財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）が発掘調査を行うことが適当であると通知した。建設省とセンターは同年5月18日付けで発掘調査の委託契約を結び、センターは5月25日から6月12日までの3週間発掘調査を実施した。なお、調査終了後の6月27日には市教委と共に遺跡報告会を実施し、約120名の参加者があった。

本報告書は、以上のような経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものであり、今後の埋蔵文化財の資料として、またこの地域の歴史を知る手がかりとして、少しでも寄与できれば幸いである。

なお、発掘調査にあたっては、建設省中国地方建設局国営備北丘陵公園工事事務所、庄原市教育委員会及び地元の方々に多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

## II 位置と環境

宮山2号遺跡は庄原市戸舞町字宮山39-1に所在する。庄原市は中国脊梁山地の南側に広がる広義の三次盆地に含まれ、市域のほぼ中央を江の川の支流西城川が西流する。市域の南部には南西方向に流れる国兼川沿いに狭小な平野部が存在し、その南側には標高250~400m台のなだらかな七塚原丘陵が広がっている。今回調査した宮山2号遺跡はこの七塚原丘陵の北東端に位置しており、市域のほぼ中央にある庄原市街地から南へ2kmの距離にある。遺跡は標高約270mの丘陵から延びる尾根の斜面に立地する。一帯には弥生時代から古墳時代にかけての集落跡や古墳など多くの遺跡が存在し、1989年以降国営備北丘陵公園整備事業に伴って、発掘調査を実施している（淺谷山東A地点遺跡・同B地点遺跡・岡山A地点遺跡・清水3号遺跡・清水4号遺跡・清水6号遺跡）。

庄原市は古くから山陽と山陰を結ぶ要衝の地であり、三次市とともに県北でも有数の遺跡密集地である。ここでは、庄原市の主要な遺跡について、調査されたものを中心にして概観していきたい。

旧石器・縄文時代 旧石器時代では、本村町・大原2号遺跡<sup>(1)</sup>で水晶製のナイフ形石器が、新庄町・小和田遺跡<sup>(2)</sup>で槍先形尖頭器が出土している。

縄文時代では、門田町・<sup>(3)</sup>若狭<sup>(4)</sup>遺跡や新庄町・和田原遺跡<sup>(5)</sup>で早期の押型文土器が出土している。湯川町・陽内遺跡は西城川に注ぐ比和川沿いの河岸段丘上に立地し、中期の配石土壙・袋状土壙や耳栓、耳飾りなどがみつかっている。

弥生時代 前期の遺跡は、明確なものはみられないが、中期後半以降、遺跡の数は増大し、多くの調査例がみられる。集落跡としては、中期後半の和田原遺跡、木戸町・隠地上組遺跡、本村町・大原1号遺跡などがある。和田原遺跡では平面形が一辺4~5m規模の隅丸方形の2本柱構造の住居跡が検出され、S B 1（B地点）は斜面上方側に段状の平坦面が設けられている。隠地上組遺跡では、平面形が径7mの円形で6本柱構造のものと平面形が一辺約4mの隅丸方形で2本柱構造の竪穴住居跡が確認されている。大原1号遺跡では平面形が円形の2本柱構造で段状平坦面をもつ住居跡と平面形が長円形で10本の柱穴をもつ住居跡が検出されている。この時期の住居跡は平面形が径または一辺が4~5mの円形・隅丸方形で、2本柱のものが多い。平和町・竜王堂遺跡では中期後葉と後期中頃の円形住居跡を検出している。これらは径4.8~8m程度で、8個以上の多柱穴の住居跡で、塩町式や山陰系の後期の土器が出土している。峰田町・尾崎遺跡、東本町・妙見山遺跡は後期から古墳時代初頭にかけての集落跡で、円形を主体にした竪穴住居跡を検出し、山陰系の土器が出土している。尾崎遺跡の住居跡からは畿内系土器が、妙見山遺跡からは吉備地域の土器が出土しており、他地域との交流や影響を知ることができる。

墳墓には、長方形の墳丘に貼石や列石を施す四隅突出型墳丘墓である山内町・田尻山第1号方



第1図 周辺遺跡分布図 (1 : 25,000)

- 1. 宮山2号遺跡
- 2. 紗見山遺跡
- 3. 瓢山古墳
- 4. 永宗遺跡
- 5. 小和田遺跡
- 6. 西山遺跡
- 7. 和田原遺跡
- 8. 大成遺跡
- 9. 甲山古墳
- 10. 亀井尻瓦窯跡
- 11. 浅谷山東B地点遺跡
- 12. 清水3号遺跡
- 13. 熊野遺跡
- 14. 御堂西古墳群
- 15. 御堂古墳群
- 16. 大風呂古墳

形墓、高町・佐田谷1号墓がある。いずれも後期に比定されており、佐田谷1号墓は木槧墓を中心としている。

古墳時代 集落跡は、前半期の4、5世紀頃のものと6、7世紀の後半期のものがある。前半期の集落跡には平和町・竜王堂遺跡（前期初頭）、新庄町・永宗遺跡（前期前半）、三日市町・大成遺跡（5世紀中葉・6世紀初頭）などが、後半期の集落跡には川西町・境ヶ谷遺跡（6世紀前半から中葉）、小和田遺跡（6世紀中葉から末）、浅谷山東B地点遺跡（6世紀後半）、是松町・則清1・2号遺跡（6世紀後半から7世紀初頭）、本村町・牛乗遺跡（6世紀後半から7世紀初頭）などがある。後半期のものを中心に、鉄滓・繩羽口・砥石・鍛造剝片などの出土や作業場的性格をもつ遺構の存在など、その多くが何らかの形で鉄器製作や鉄生産に関わった形跡がみられ、中国山地に産する砂鉄を主原料とする鉄生産の広がりを窺うことができる。

古墳の調査例は多い。前半期古墳には、木棺・箱式石棺・竪穴式石室など竪穴系の多様な埋葬施設がみられる。木棺直葬のものとして、板橋町・御堂西古墳群、同・大風呂古墳群、峰町・発展第1・3号古墳、七塚町・大唱山第1・2・5号古墳などがある。4世紀末から5世紀中頃にかけての御堂西古墳群以外は概ね5世紀後半から6世紀前半にかけて築造されている。箱式石棺を内部主体とするものとしては、平和町・西ヶ迫第11・12・15号古墳が、粘土槧を内部主体とするものとしては、山内町・田尻山第16号古墳や本村町と峰町にまたがる月貞寺第21号古墳などがあり、いずれも5世紀後半に築造されている。月貞寺第31号古墳は小型の竪穴式石室2基を、第29号古墳は簡略化した粘土槧3基を埋葬施設とし、5世紀後半から6世紀前半に築造されている。

竪穴式石室を埋葬施設とする古墳は6世紀後半以降急増し、月貞寺第28・32号古墳、水越町・流田山第2号古墳、川西町・境ヶ谷第1号古墳、同・境ヶ谷南第3号古墳、高町・篠津原第3号古墳、本村町・国重第1号古墳などがある。

古代 飛鳥時代（白鳳期）の軒丸瓦などが出土した宮内町・伝神福寺跡や奈良時代の亀井尻瓦窯跡・新池瓦窯散布地がある。また、平城宮出土木簡や文献資料によると、現在の庄原市域を含む三上郡・恵蘇郡など備後北部の諸郡では調の絹糸の代わりに銛や鉄を中央に送っており、古代には、鉄生産が盛んであったことが窺える。

## 註

- (1) 三枝健二「石を読む」「みよし風土記の丘」N0.52 みよし風土記の丘友の会 1995年
- (2) 広島県教育委員会・㈱広島県埋蔵文化財調査センター「小和田遺跡」「西山・小和田・永宗」 1982年
- (3) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「和田原遺跡」 1988年
- (4) 庄原市教育委員会「陽内遺跡見学会資料」 1996年
- (5) ㈱広島県埋蔵文化財調査センター「隠地上組遺跡」 1984年
- (6) 広島県教育委員会「大原1号遺跡」「中国綴貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(1) 1978年
- (7) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「竜王堂遺跡」 1994年
- (8) 庄原市教育委員会「尾崎遺跡見学会資料」 1995年
- (9) 庄原市教育委員会「妙見山遺跡見学会資料」 1996年
- (10) 広島県教育委員会「田尻山古墳群」「中国綴貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(1) 1978年

- (11) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「佐田谷墳墓群」 1987年
- (12) 広島県教育委員会・㈱広島県埋蔵文化財調査センター「永宗遺跡」「西山・小和田・永宗」 1982年
- (13) 大成遺跡調査団「庄原市大成遺跡の発掘調査」 1986年  
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大成遺跡」 1989年
- (14) 広島県教育委員会・㈱広島県埋蔵文化財調査センター「境ヶ谷遺跡群」 1983年
- (15) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「浅谷山東B地点遺跡」 1992年
- (16) 庄原市教育委員会「則清1・2号遺跡」 1993年
- (17) 広島県教育委員会「牛乘遺跡」「中国継貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(1) 1978年
- (18) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「御堂西古墳群発掘調査報告」 1984年
- (19) 広島県教育委員会「大風呂古墳発掘調査概報」 1976年
- (20) 広島県教育委員会「発展古墳群」「中国継貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(1) 1978年
- (21) 広島県教育委員会「大唱山古墳群」「中国継貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(1) 1978年
- (22) 広島県教育委員会・㈱広島県埋蔵文化財調査センター「西ヶ迫古墳群」 1983年
- (23) 広島県教育委員会「月貞寺古墳群」「中国継貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(1) 1978年
- (24) 広島県教育委員会・㈱広島県埋蔵文化財調査センター「流田山第2号古墳」「西ヶ迫古墳群」 1983年
- (25) 広島県教育委員会「猿津原遺跡群」「中国継貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(1) 1978年
- (26) 広島県教育委員会「国重第1号古墳」「中国継貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(1) 1978年
- (27) 「備後國三上郡調査壹拾口天平十八年」「三上郡信教郷調査十口」など(広島県『広島県史』古代中世資料編 I 1974年)
- (28) 『類聚三代格』延暦廿四(805)年十二月七日 太政官奏 (広島県『広島県史』古代中世資料編 I 1974年)

### III 調査の概要

宮山2号遺跡は、庄原市街地の南約2kmで、ほぼ北から南に延びる低丘陵先端部の西向き斜面（標高270m）に立地する弥生時代中期の集落跡である。調査区のある斜面の下方は丘陵尾根の狹隘な谷間に水田が営まれており、この水田面から調査区までの比高は約10mである。

調査は重機により表土を除去し、遺構の精査・掘り下げを行った。

検出した遺構は、竪穴住居跡1軒（S B 1）、ピットである。遺構に伴い弥生時代中期を中心とする土器片（甕・高杯）、石器（石鏃未完成品・楔形石器・砥石）が出土している。



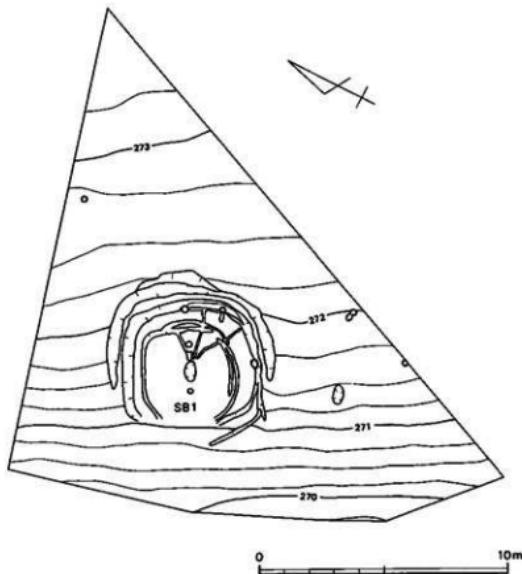
第2図 周辺地形図（1：2,000）（アミは調査区を示す。）

## IV 遺構と遺物

### SB1 (第4図、図版2c~5b)

調査区中央にある竪穴住居跡SB1は、平面形が隅丸方形で、東西5.4m、南北5.6mの規模をもつ。壁高は最も残りの良い東壁で1mを測る。住居背後の東側を中心として北側及び南側にかけて幅30cm、高さ30cm程度の段状の平坦面が設けられている。その規模は東西4.1m、南北6.7mで、壁際には上端幅10cm、深さ(最大)4cmの壁溝(f)が巡っている。

住居の床面には同心円状に巡る計5本の壁溝(a~e)がみられることから、4回の建て替えが考えられる。壁際の溝dが最も新しい住居に伴うもので、それ以外の溝a~c・eは先行する住居に伴うものである。溝a・cは溝bによって壊されていることから、溝a・cを壁溝とする住居が最も古いと考えられる。溝eについては先後関係は不明確である。これらから、本住居の建て替えの新旧関係は、SB1a・1c(古)→SB1b→SB1d(新)となると考えられる。SB1a・1b・1cはほぼ同規模の住居で、壁溝がほぼ全周するSB1bの床面積は約13m<sup>2</sup>である。最も新しく規模も大きいSB1dの床面積は約23m<sup>2</sup>で、SB1bの1.8倍に拡張している。壁溝の規模は、SB1a・1cとともに部分的な残存にすぎず、その全容を窺うことはできないが、



第3図 遺構配置図 (1:200)

現状ではSB1aが上端幅7~11cm、深さ1cm、SB1cは上端幅13~15cm、深さ1cmである。いずれもかなり削平されており、残りはよくない。SB1bの壁溝は上端幅6~21cm、深さ（最大）8cmで、溝底面は東側が高く、最大高低差10cmで西斜面側に緩やかに下っている。なお、南東側で約10cm、西斜面側で約2m途切れている。SB1dの壁溝の規模は、上端幅6~30cm、深さ（最大）7cmで、溝底面は東側が高く、最大高低差13cmで西斜面側に緩やかに下っている。なお、SB1dの東壁南半では2.5mほど壁溝が壁際から最大25cm離れている。住居南西側に南壁から短く西斜面側に延びる溝eは上端幅10~14cm、深さ（最大）14cmと深く、その底面は最大高低差20cmで下っている。

主柱穴はP1・P2の2個で、東西に2本の主柱を配する柱構造の住居である。P1・P2の柱間距離は1.9m、各柱穴の規模はP1が長径26cm、短径22cm、深さ57cm、P2が径が22cm、深さ67cmである。この主柱穴以外にはSB1dの東壁及び南壁の壁溝内や壁際に径24~34cm、深さ15~48cmのピット4個が認められるが、対応する住居やその柱構造は不明である。

2本の主柱穴に挟まれた床面ほぼ中央に長径78cm、短径46cm、深さ25cmの平面形が東西方向に長い楕円形の小土壙が存在する。埋土には炭化材が含まれることから、炉跡と考えられる。また、この炉跡の北側の床面には南北40~80cm、東西2.3mの焼土の広がりがみられ、炉跡から搔き出された可能性がある。

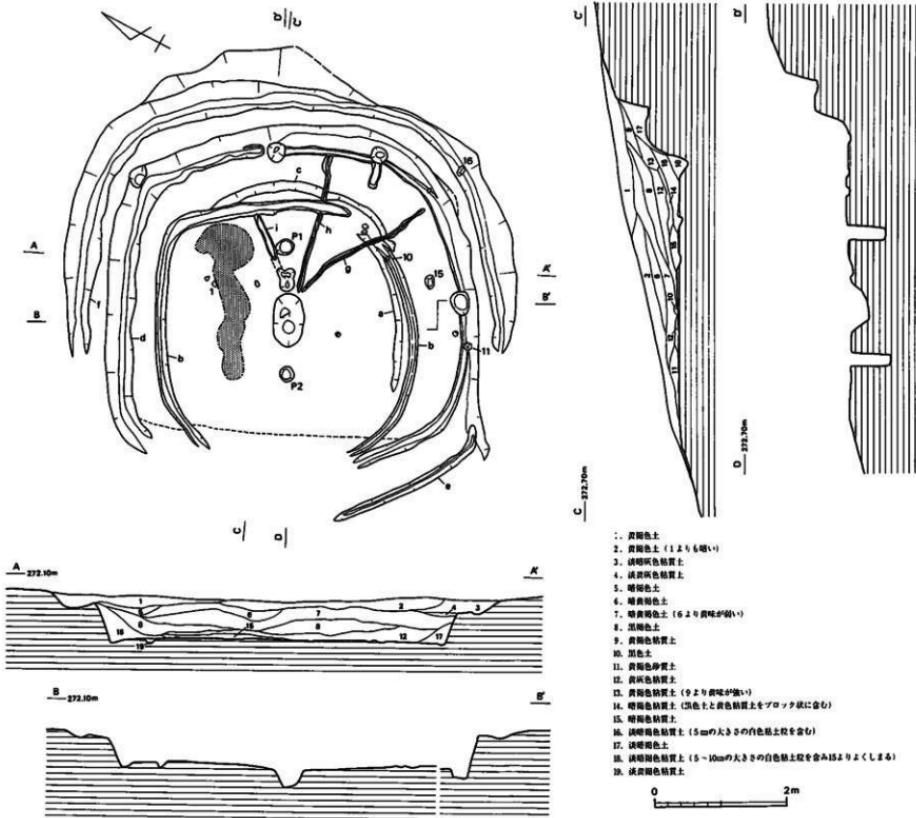
この炉跡あたりの床面中央から北東・東・南東方向に3条の溝が放射状に延びており、住居の床を区画する間仕切りの溝と考えられる。溝iは最も短く、炉跡東側から北東方向に延びて、SB1bの東側の壁溝で止まっていることから、SB1bに伴う可能性が高い。その規模は、上端幅10cm、深さ（最大）3cmである。炉跡の東側から東と南東方向に延びる溝hと溝gはSB1a・1b・1cの壁溝を壊して、SB1dの壁溝に達していることから、SB1dに伴う間仕切りの溝と考えられる。これらの溝の規模は、溝hが上端幅5~10cm、深さ（最大）1cm、溝gが上端幅3~7cm、深さ（最大）3cmである。

出土遺物は覆土・床面上ともそれほど多くない。床面上から出土した遺物には、弥生土器（甕口縁部1、底部10・11）、石器（砥石15・16）がある。1は床面北側の焼土面、10は床面南側のSB1bの壁溝直上、11は同じくSB1dの壁溝直上、15は同じく床面南側、16は段状平坦面南東隅の壁溝直上からそれぞれ出土した。なお、覆土からの出土遺物としては、弥生土器（甕口縁部2~6、高杯脚部7~9）、石器（石鎌未成品12・13、楔形石器14）がある。

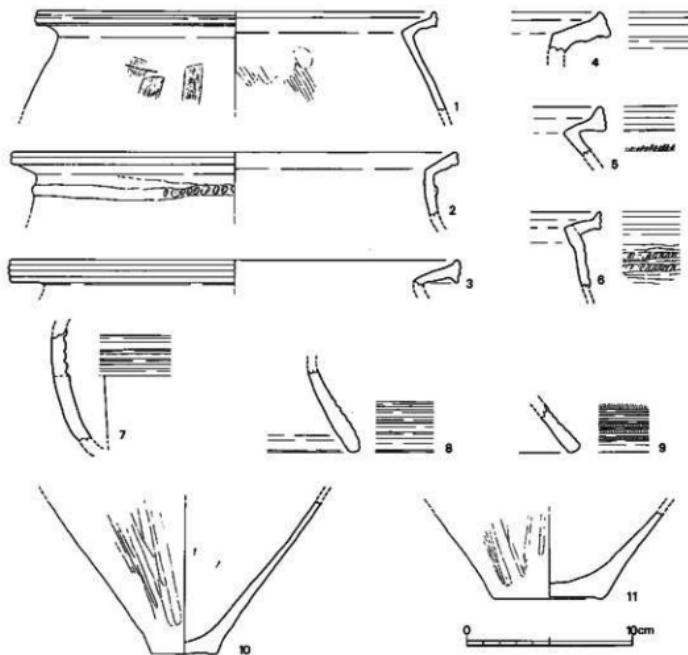
### S B 1 出土遺物（第5・6図、図版6）

床面上及び覆土から、弥生土器（甕・高杯・底部）、石器（石鎌未成品・楔形石器・砥石）が出土した。

①弥生土器（第5図1~11） 1~6は甕の口縁部片である。1は頸部で「く」字状に屈曲して外上方に直線的に延びた口縁の端部を上方に引き出し、端面に2条の凹線を巡らしている。調整は、口縁内外面が横ナデ、体部内面が斜位のハケ目で指頭圧痕が一部にみられる。体部外面は頸



第4図 SB 1実測図 (1:60)



第5図 SB 1出土遺物実測図 (1) (1:3) 赤生土器

部に横ナデが及ぶがその下位には縦位の細かいハケ目が施されている。復元口径23.8cm。2は垂直に立ち上がる頸部から逆「L」字状に屈曲して外上方に直線的に延びた口縁の端部を僅に肥厚させ、端面中央に凹線1条を施している。外面の頸部直下に1条の貼付突帯を巡らせ、その上面には刺突文を連続的に施している。調整は磨滅のため不明確であるが、体部外面には縦位のハケ目と思われる調整が施されている。復元口径26.4cm。3は頸部で「く」字状に屈曲して外上方に直線的に延びた口縁の端部を上下に拡張し、端面に3条の凹線を施している。調整は、口縁内外面に横ナデを施している。復元口径26.6cm。4～6は口縁の小破片で、いずれも口径は不明である。4は垂直気味の頸部から外上方に直線的に延びるやや分厚い口縁で、端部を上下に短く引き出して、端面には2条の凹線が施されている。端部から外面にかけて強い横ナデがみられる。5は強く「く」字状に屈曲した頸部から外上方に短く直線的に延びた口縁の端部を上下に強く肥厚させ、端面に3条の凹線を施している。外面の頸部直下の体部には横方向に刺突文を施している。調整は、口縁内外面から体部外面にかけて横ナデを行っている。6はやや内頸気味に立ち上がり、頸部で「く」字状に屈曲し、外上方に直線的に延びた口縁の端部を上下に拡張し、垂直な端面に2条の凹線を施している。外面体部には斜位の刺突文が連続的にみられ、その上から粗い

横ナデを行っている。

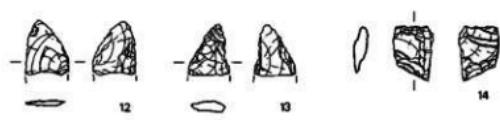
7～9はラッパ状に開く高杯の脚部片である。いずれも小片のため、脚端径などは不明である。7は脚柱部付近の破片で、下半に透かし穴がみられる。その上方の外面には現状で4条の凹線が認められる。調整は、外面横ナデ、内面は不明である。8・9は脚端部付近の破片で、端部はやや丸みをおびた平坦に納めている。外面下半には凹線文6条が施されており、9は凹線文に先行する斜位の彫描文が認められる。調整は磨滅が著しく不明である。

10・11は平底の底部片で、底径は10が3.8cm、11は6.3cmである。調整は、10が内面は縦位のナデ、外面は縦位のヘラミガキとみられる。11は内面は不明、外面は縦位のヘラミガキと考えられる。

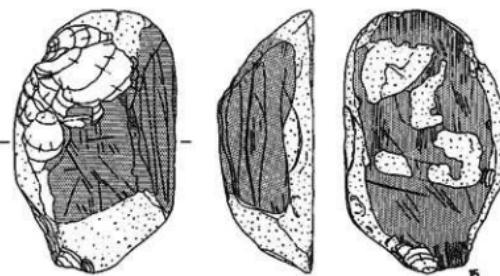
②石器（第6図12～16） 12・13は石鎚の未成品とみられるもので、いずれも横長系の素材剥片を用いてその打面側あるいは端面側に加工を加えて刃部を形成しようとしている。現存規模は12が長さ2.2cm、幅1.75cm、厚さ2mm、13は長さ2.05cm、幅1.7cm、厚さ4.5mmである。石材は微花崗岩である。

14は楔形石器で、上下の縁辺に両端加撃による小剝離痕が連続的にみられる。長さ2.2cm、幅1.65cm、厚さ5.5mmで、石材は微花崗岩である。

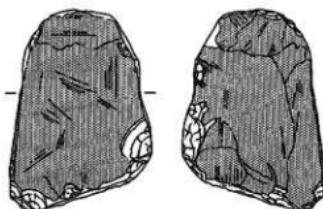
15・16は砥石である。石材はいずれも半花崗岩で、大型で分厚い15は表裏面と右側面の3面を使用し、縦あるいは左上一右下方向の斜めに走る擦痕が顕著にみられる。特に、右側面の縦に長く延びる深くて強い擦痕は特徴的である。16は扁平な砥石で、表裏2面を使用している。擦痕はそれほど顕著ではないが、縦あるいは斜めのごく短く細い擦痕が表裏とも比較的よくみられる。大きさは、15が最大長21.0cm、最大幅13.0cm、最大厚7.8cm、重さ2.394kg、16が最大長16.2cm、最大幅11.5cm、最大厚3.7cm、厚さ856gである。



0 10cm



0  
20cm



第6図 SB1出土遺物実測図(2) (1:2, 1:4) 石器

## V まとめ

宮山2号遺跡は庄原市戸郷町に所在し、七塚原丘陵の北東端の尾根西斜面に立地する弥生時代の集落跡である。検出した遺構は、竪穴住居跡1軒とピットである。

SB1は平面形が東西5.4m、南北5.6mの隅丸方形の2本柱構造の住居跡で、背後には段状の平坦面が巡っている。住居の床面には同心円状に5本の壁溝が認められることから、4回の建て替えが考えられ、住居は約2倍に拡張されている。また、床面中央の炉跡から壁溝に向かって放射状に延びる床溝が確認された。出土土器（壺・高杯）は塩町式土器の特徴を備えていることから、弥生時代中期後半にSB1の時期を考えることができよう。

このSB1の特徴をまとめると、①弥生時代中期後半、②平面形隅丸方形、③2本柱構造、④段状平坦面の存在、⑤床溝の存在となろう。特に2本柱構造であることは特徴的である。2本柱構造の住居跡は弥生時代から古墳時代にかけてみられるが、特に弥生時代中期を中心に入られるようである。この時期の2本柱構造の住居跡は平面形が円形・楕円形ないしは隅丸方形であることが多い、県北（庄原市域）や県南（福山市域・東広島市域）を中心にみられる。これら県内の弥生時代中期の2本柱構造の住居跡例と宮山2号遺跡SB1とを比較すると、住居背後の段状の平坦面や床溝をもつものはそれほど多くない。段状平坦面をもつものは、庄原市の和田原B地点遺跡SB1、大原1号遺跡1号住居、東広島市の宮領1号遺跡SB1の3例（壁溝を併せもつものは宮領例のみ）で、そのほか可能性のあるものとして、東広島市の下上戸遺跡（東広島市調査分）<sup>(4)</sup>SB7、福山市の手坊谷遺跡群7号住居、沢田遺跡SB5がある。また、床溝をもつ住居跡としては、庄原市の和田原B地点遺跡SB1、東広島市の下上戸遺跡（当センター調査分）<sup>(5)</sup>SB3、同（東広島市調査分）SB2、福山市の手坊谷遺跡群7・12号住居、池ノ内遺跡群6・22・24号住居、長波遺跡SB50がある。庄原市の和田原B地点遺跡SB1は段状平坦面・床溝のいずれをもち、平面形・規模等を含めて最も宮山2号遺跡SB1に類似する住居跡であろう。

なお、2本柱構造の住居について、さらに主柱穴の柱間距離、主柱穴の配置、石器製作との関連性を検討してみたい。弥生時代中期を中心とした時期の2本柱構造の住居の主柱穴間の距離は、県内例（遺構数42軒）の平均値が1.34mで比較的主柱が近接する感が強いが、宮山2号遺跡SB1は1.92m、類似する和田原B地点遺跡SB1は2.22mとかなり広い。また、主柱穴の配置については、県内例の大半が等高線・尾根線に平行（横方向）に配されているのに対し、宮山2号遺跡SB1は直交（縦方向）に配置されている。尾根斜面に立地する住居跡で等高線に直交して主柱穴が配置される例は少なく、東広島市の下上戸遺跡（東広島市調査分）SB1、福山市の池ノ内遺跡群6号住居、西ヶ峰遺跡SB8・28などがあるにすぎない。

石器製作との関連性でいえば、宮山2号遺跡SB1からは石錐未成品・剝片や楔形石器などが出土している。県内例では、庄原市の和田原B地点遺跡SB1（石錐）、大原1号遺跡1号住居（石錐）、東広島市の宮領1号遺跡SB2（石錐・敲石）、下上戸遺跡（当センター調査分）SB

3（石鎌・剝片），同（東広島市調査分）SB1（石鎌・剝片）・SB2（石鎌・楔形石器）・SB6（石鎌・剝片）・SB7（石鎌）・SB8（石鎌）・SB9（石鎌），小越遺跡No23遺構（剝片・楔形石器），福山市の手坊谷遺跡群12号住居（石鎌）・13号住居（石鎌），池ノ内遺跡群23号住居（石鎌・刃器）・33号住居（刃器），茜ヶ崎遺跡SB28（石鎌・剝片・敲石・楔形石器）などから石鎌や剝片をはじめとする関連遺物が出土している。特に、東広島市の下上戸遺跡（当センター調査分）SB3，同（東広島市調査分）SB6，小越遺跡No23遺構，福山市の茜ヶ崎遺跡SB28では石鎌のほかに，床面から剝片や碎片が多数出土し，楔形石器や敲石といった道具類も出土していることから，住居内での石器製作を考えることができる。

以上のように，宮山2号遺跡の今回の調査で検出したSB1は，弥生時代中期を中心とした時期に県北（庄原市域）や県南（福山市域・東広島市域）などでよくみられる2本柱構造の住居跡に比較的共通する形態・構造上の特徴をもつが，主柱穴の配置状況や柱穴間の距離などに違いがみられた。また，石器製作との関連性が窺える。

SB1を含む集落そのものの構造についてはごく一部の調査であったために明確ではないが，集落が北側調査区外（尾根基部側）に広がることは明らかであり，その調査の進捗によって本集落の構造が解明されるものと思われる。

#### 註

- (1) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「和田原遺跡」 1988年
- (2) 広島県教育委員会「大原1号遺跡」「中国総貢自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(1) 1978年
- (3) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「宮領1号遺跡」「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(IX) 1993年
- (4) 財団法人東広島市教育文化振興事業団「下上戸遺跡発掘調査報告書」 1996年
- (5) 広島県教育委員会「手坊谷遺跡群」「県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告」 1976年
- (6) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「沢田遺跡」「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(VII) 1991年
- (7) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「下戸遺跡」 1996年
- (8) 広島県教育委員会「池ノ内遺跡群」「県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告」 1976年
- (9) 建設省福山工事事務所・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「長波遺跡」「松永バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告」 1984年
- (10) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「茜ヶ崎遺跡」「石鎌推定遺跡群・茜ヶ崎遺跡発掘調査報告」 1985年
- (11) 財団法人東広島市教育文化振興事業団「小越遺跡発掘調査報告書」 1997年





a 遺跡全景  
(調査前、北から)



b 同上  
(調査後、北から)



c S B 1 検出状況  
(北から)



a SB 1 検出状況  
(西から)



b SB 1 土層断面  
(東西方向。南から)



c 同上  
(南北方向、西から)



a S B 1 土層断面  
(南北方向南半, 西から)



b 同上  
(南北方向北半, 西から)



c S B 1 遺物出土状況  
(西から)



d (左) 同上 (甕1)  
e (右) 同上 (底部II)



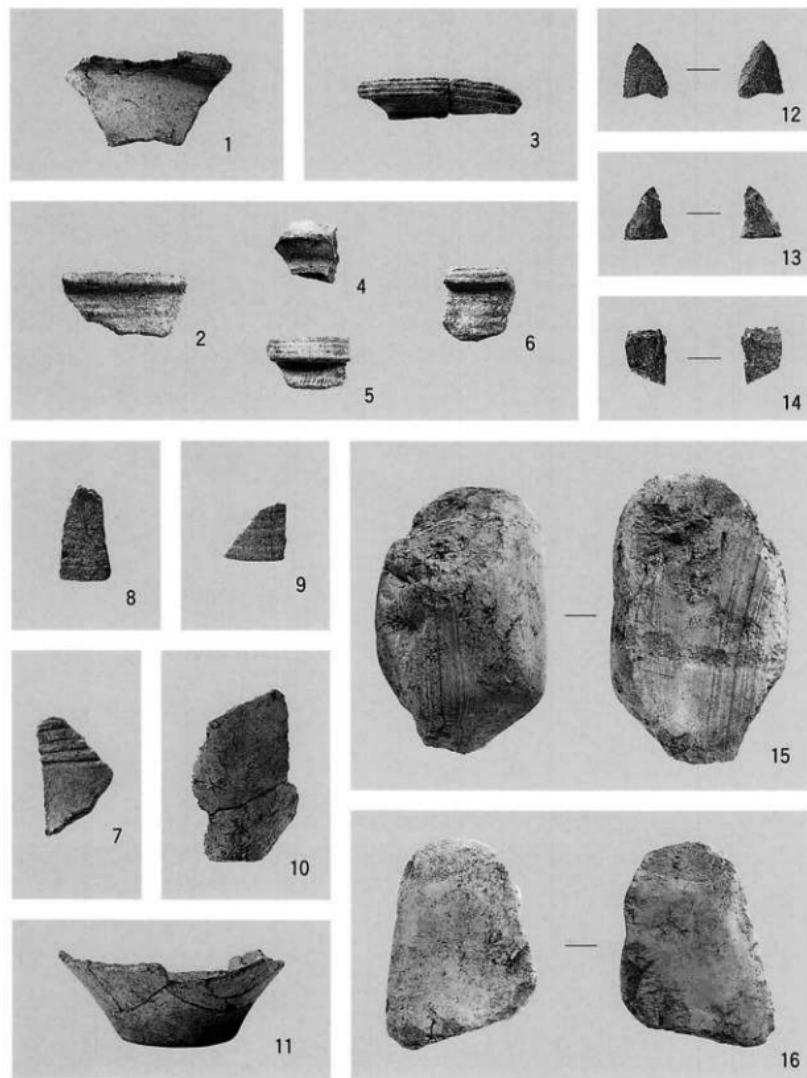
a S B 1 完掘状況  
(西から)



b 同上  
(北から)



c S B 1 作業風景  
(西から)



出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	みややまにごういせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	宮山2号遺跡発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書							
シリーズ番号	第180集							
編著者名	沖元美稚子							
編集機関	財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8番49号							
発行年月日	西暦1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° °'	東経 ° °'	調査期間	調査面積	調査原因
宮山2号遺跡	広島県庄原市 戸郷町	34210		34° 50° 28°	133° 0° 55°	19980525 ~ 19980612	223m <sup>2</sup>	国営備北 丘陵公園 整備事業 に係る 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
宮山2号遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居 跡1軒	弥生土器 ・石器				

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第180集

宮山2号遺跡発掘調査報告書

発行日 1999(平成11)年3月31日

編集・発行 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター

〒733-0036 広島市西区緑音新町四丁目8番49号

TEL (082) 295-5751

印刷所 西日本印刷株式会社